

Kameda

2024.9 No.281



医療と品質管理

亀田メディカルセンターの理念

私たちは、全ての人々の幸福に貢献するために
愛の心を持って常に最高水準の医療を提供し続けます

最も尊ぶこと：患者さまのためにすべてを優先して貢献すること

最も尊ぶ財産：職員全員とその間をつなぐ信頼と尊敬

最も尊ぶ精神：固定観念にとらわれないチャレンジ精神

CONTENTS

亀田総合病院報
No.281
2024年9月号

3 巻頭言

4 かめナビ 医療と品質管理

8 看護の目 働くナースの日々の景色から

10 Close Up News

14 病院は誰かの仕事でできている

巻頭言

Local & Globalに対応する医療提供から ボーダレス Borderlessな医療提供への飛躍を

亀田総合病院 副院長 植田 健一

昨年9月、Local & Globalをテーマに巻頭言を執筆し、『安房鴨川地域の患者には、主にCommon Disease(日常診療で遭遇する頻度の高い疾患)を含めた包括的な医療を提供し、日本全国にとどまらず世界を相手に、専門性の高い、特色ある医療を提供していくことがKamedaの実行すべき「Local & Global」な医療の提供である』と述べました。が、これを読み返して自分自身この一年で捉え方の視点が変化していることに気づきました。それは医師の働き方改革による影響や諸外国の医療事情により必ずしもLocal & GlobalがこれからのKamedaが目指すべきところではないと考えるようになったからです。

まず、医師の働き方改革により、労働時間の管理が厳格になった影響がLocalに確実に現れてきています。他施設の多くが時間外労働を制限するために緊急手術の受け入れや長時間手術の制限を行うようになってきています。実際にこれまでは他の地域で対応していた緊急症例が当院に搬送されてきています。そしてこれから予定手術の手術難民が全国的に増加することは容易に察しがつきます。今後、専門性の高くない手術でも安房鴨川地域を超えた広範囲から集患できるようになるかもしれません。

また、外国ではもともと手術待機時間が長い先進国がいくつかあります。イギリスでは通常の外来受診、手術の制限により患者が救急外来に殺到しパンクしているという記事がNew York Times(2024/1/17)に掲載されていました。これはカナダでも同様で、例えば定期の膝関節手術を受けるには半年以上の待機時間があるため高額を支払ってでも米

国で手術を受ける患者が増加しています。諸外国から日本へ医療を受けに来るインバウンド(Global)患者に関しても特殊な治療や検査をアピールするだけではなく、一般的な治療に関しても質の高い医療をタイムリーに提供することで集患につながるかもしれません。このように今後はLocalをターゲットにした医療とGlobalをターゲットにした医療の線引きが曖昧になってくることが予想されます。

話は変わりますが、先日、日本麻酔科学会で東京大学教授・稲見昌彦先生の特別講演を拝聴しました。彼は「稲見自在化身体プロジェクト」という国家プロジェクトのリーダーであり、そのプロジェクトでは5つのテーマ、1)感覚強化、2)物理身体強化、3)変身、4)分身、5)合体を掲げています。詳細は省きますが、氏の研究開発による「自在化技術」が医療に応用されることで物理的な距離の制限がない遠隔診断や治療が可能になり、いよいよLocalとGlobalの境界がなくなるBorderlessの時代が訪れます。

今後、Kamedaの医療提供を行う対象が「Local & Global」という二極化した概念から脱却し、医療圏という概念を持たないBorderlessな医療提供を行うことで、新たな活路を見出せるのではないかと思います。例えば、予定手術や検査の待機日数を公開することで医療圏を超えた集患が可能になるかもしれません。日本の医療の在り方が急激に変化している中で、失敗を恐れず新しい風を取り入れるKamedaマインドが本領を発揮する時機が来たのではないかと期待しています。

今年、ISO9001の認証から25年、JCI認証から15年という亀田の品質管理にとって節目の年です。そこで今回はこれまでの歩みや、次のステップについてアントニオシルバ・ペレス品質管理部長にお話を伺いました。



【アントニオ部長プロフィール】品質管理部長・国際関係部長を兼任。JCIの主任審査員を18年間務め、40か国の病院のJCI審査を行った。メキシコ出身で奥様ともども大の日本びいき。世界中・日本中の医療機関を飛び回る傍ら、お子様二人と愛犬と鴨川ライフを楽しんでいる

病院の品質管理とは

品質管理とは、製品を製造する工程で、製品の品質を管理する取り組みのことです。品質管理というと車の工場を思い浮かべる人も多いでしょう。品質管理には、①決められた期限内に必要なパーツを手順通りに組み立てる工程管理、②買う人の期待に添えているか、安全か、環境にやさしいかなどをチェックする品質検証、そして③万一不具合が発生した際に原因を検証し、再発防止に努める品質改善の3つの管理があります。「KAIZEN」が世界共通用語でもあることからわかるように、品質管理は日本の得意分野です。高度成長期から徹底した品質管理のもとに質の高い製品を製造し、「Made in Japanならば信頼に値する」と世界にお墨付きをもらってきました。

一方、医療の分野ではどうでしょうか。1990年代の日本では、医療分野での品質管理はまだ進んでおらず、病棟ごとに手順がバラバラだったり、インシデントレポートといったミスを報告し次に同じミスをしないようにつなげていく仕組みや、「転倒リスクの高いこの患者さまをどのように転倒させないようにするか」と考えるリスクアセスメントの考え方も体系的には行われていない現状でした。

亀田と品質管理の旅

日本では健康保険証があれば、全国どこでも医療機関にも自由にかかれます。また、大きな病院のベテラン医師であっても、経験の浅い若手医師であってもかかる費用は同じです。これは「日本全国どの医療機関でも医療の質は同じ」という前提で成り立っています。例えばアメリカでは有名な医師に治療してもらう場合はそれなりの費用がかかります。日本の国民皆保険は世界に誇れるシステムですが、「病院の質」「病院の差」が分かりにくい一面もあります。

そのため亀田総合病院は早くから国内の医療機関との比較ではなく、海外の医療機関との比較を念頭に置いていました。「世界から見て亀田病院は今、どのような立ち位置にあるのだろう」という疑問が常にあったと当時を知る職員は言います。そこで1992年、日本で初めて米国メリーランド州病院協会(MHA)が運営する臨床指標プロジェクトに参加しました。「手術後、一定期間内にどれほどの確率で緊急再手術が発生したか」などといったデータを定期的に送り、メリーランド州内の700余りの病院と比較しました。他院と比べて数値が悪い場合は優良事例(ベストプラクティス)と比較分析し、改善につなげました。

費用の問題などでMHAのプロジェクトは中断しましたが、その後、当院と同等規模の医療機関とともに「Voluntary Hospitals of Japan(VHJ)」を立ち上げ、国内の指標の比較などを行っています。これは現在も続いており、病院間の活発な情報共有や災害時の支援などが行われています。

品質管理に大きな転機が訪れたのは2000年3月です。この年、亀田総合病院はISO9001の認証を取得しました。さらに2009年には日本で初めてJCI認証を受けました。アントニオシルバ・ペレス部長が初めて来院したのはこの時で、JCIの審査員としてでした。3年後の更新審査では、JCIのチームリーダーとして再び来院しました。「日本が大好き」というアントニオ部長は翌年の2013年、家族とともに日本へ移住し、亀田総合病院の品質管理部長として着任しました。

おさらい① ISO9001とは
組織が提供する「商品やサービスの品質向上」を目的とした品質マネジメントシステム規格のことです。ISO9001は商品やサービスが顧客の手に渡るための仕事のルールであり、このルールをしっかりと守ることにより、高い品質を保った商品やサービスが顧客に提供されるという考え方です。

おさらい② JCI (Joint Commission International) とは
アメリカの医療分野における第三者評価機関「The Joint Commission」の国際部門として1994年に設立された非営利組織です。「患者安全」と「医療の質向上」を継続的に促進する組織を醸成することを目的としています。1,000を超える基準(スタンダード)がきちんと運用されているかなど、医療機関が安全で質の高い医療を提供しているかを審査します。2024年現在、JCIは70か国で審査を行っています。

どこでも「亀田クオリティ」

「Quality is Kameda's attribute(品質こそ亀田の誇り)」と言い切るアントニオ部長。亀田グループのどこでも、同じ「亀田クオリティ」の医療を提供したいという思いがあります。そのためのツールがISO9001(以下ISO)だといいます。

「亀田グループ」と口で言うのは簡単ですが、全事業所で高い品質水準を保つことは容易ではありません。工場のロボットのように決められた手順を繰り返すのとは違い、医療では多くの場面で人が自分の手で提供しています。人がやるからこそ、やり方が異なったり、ミスが起きてしまうことがあります。

ISOは最適な手順を決め、それを継続して実施すること、また万一ミスが起きた場合はしっかりと予防する仕組みを提供しています。また、BSIジャパン(英国規格協会)のような認証機関が、きちんと亀田グループの各事業所を審査して取り組みを評価し、第三者として品質を保証することも重要だといいます。

初めは亀田総合病院・亀田クリニックのみISO認証を受けていましたが、現在では亀田グループすべての事業所が認証を受けています。2013年に開院し、2015年にISO認証を取得した亀田京橋クリニックでは、海外からの患者さまにもご利用いただいていることを念頭に「先にJCI認証を受けてはどうか」という声もあったそうですが、「まずはISOから」とアントニオ部長が強くプッシュした理由もそうした背景があったからだそうです(なお亀田京橋クリニックはISO認証を取得したその翌年にJCI認証も受けました)。

グローバルなJCI ローカルなISO

アントニオ部長が亀田総合病院に着任した際にもうひとつ強く推進したのが、JCIとISOを統合すること

です。当時はJCIとISOはバラバラの取り組みで、どちらも品質管理にとって重要であるにもかかわらず、それぞれが独自に行われており、かみ合っていない状況でした。そこで理事長に「自分に両方担当させてほしい」と頼み込んだそうです。

JCIは「改善」が重要なポイントです。世界中の病院から集めた優れた知見「ベストプラクティス(もっともすぐれた手法)」などをもとに目標を定め、それに向かって計画を立て実行し、実行に際して起きた問題などを分析することに長けています。一方でISOは「標準化」がポイントで、JCIによって成長し、その成長の成果を標準化し、職員の誰もが継続的に実践できるようにすることに長けています。またISOは審査員が日本の法律やルールを理解し、遵守のためのサポートも行っています。一方でJCIは「自分の国のルールをしっかりと守ってください」と言うものの、具体的な内容は決められていません。

またISOは医療だけではなく、製造業・サービス業など幅広い領域をカバーしています。そのため、枠組みや取り組みがざっくりとしているのが特徴です。例えば、ルール・手順は自分たちで決めてしっかり文書化すること。医療機関から車製造業まで、幅広く取り入れることができます。

一方でJCIは医療に特化しています。感染対策の取り組みなど、分野ごとに細かく基準が決められています。アントニオ部長によれば「互いに互いの弱点を補っており、どちらも非常に重要。ISOとJCIを融合することにより、広い視点から、そして細かい点までまんべんなく網羅できます」とのこと。

JCIの裏にストーリーあり

JCIが決めるすべての基準(スタンダード)の裏にはストーリーがあるとアントニオ部長は言います。世界のどこかの病院で、患者さまやスタッフになんらかの影響や損害があり、それを防止するために基準やルールが定められているからだそうです。

JCIでは、ひとつでも未達成だと再審査となってしまふ「IPSG(国際患者安全目標)」という項目を設けています。JCIの先駆けとなった米国のJC(The Joint Commission)では、米国内の医療機関で起きたインシデント(事故)の中でも、重大事象につながり得ると判断されたものについて、巨大なデータベースを有しています。JCはこのデータベースを整理し、どういった



理由でこうした事故が起きてしまったのかをカテゴリ分けしました。

このときできた6つのカテゴリが、現在IPSGのもとになっている6項目です。例えば患者さまの2点識別。亀田クリニックを受診した際、医師や看護師、検査技師や薬剤師などに「名前と生年月日」を何度も聞かれることは皆さまご存じだと思います。これも米国の医療機関で同姓同名の患者の取り違えが何度もあったことを受け、誕生しています。

また転倒・転落も患者に重大な影響を与えたり、時には死に至る事故となったこともありました。そのためIPSGでは患者の転倒するリスクを把握し、転倒予防のために介入するようになっています。当院でも外来患者さまに黄色いファイルを持っていたり、入院患者さまの腕ベルトに黄色いリボンをつけることにより、スタッフが転倒リスクがあることをすぐに把握し、そのためのサポートができる仕組みができています。「JCIには1,000を超える項目がありますが、このすべてに物語があり、同じ過ちを繰り返すことがないよう、学び・改善の願いが込められています」とアントニオ部長は言います。

JCIが感染症を予言!?

2013年、JCIは新しい基準のひとつとして「空気感染する感染症患者を急に受け入れることになった際の管理」という項目を追加しました。これは新型コロナウイルス感染症がはじめて報告された6年も前のことです。

ただ、JCIが新型コロナウイルス感染症を予測していたわけではなく、「困難な体験を通じて学びました」とアントニオ部長は言います。重症急性呼吸器症候群(SARS)の流行後にシンガポールの病院を訪れた経験を振り返ります。シンガポールではSARS流行の際にスタッフの命を守るN95マスクが国内生産でできず、品薄に苦しみました。この経験からJCIはサプライチェーン(原材料の調達、生産、加工、流通、そして販売

の一連の流れ)の追跡や分析を行うことを推奨しています。サプライチェーンを遡ることで、スタッフの安全を守ることでできる品質の高いマスクであることも確認できます。

JCIは基本的に何をしてほしいか＝「パンデミックに備えよ」というリクエストはしますが、それをどう達成するかは医療機関に委ねられています。当院の場合は、「災害対策調整室の存在が大きく、パンデミックを想定した訓練計画をたて、必要な資材の洗い出し、取り決めなどをまとめてくれたことが、のちの新型コロナウイルス感染症の流行に立ち向かう大きな強みとなった」と振り返ります。

こうなると気になるのが次に新たに登場するJCIの基準です。アントニオ部長はJCIが次に重きを置いているのは「医療の継続」だと言います。感染症、サイバー攻撃、災害など、医療機関がストップしてしまう原因はさまざまありますが、そのようなときにもきちんと業務を継続する体制を維持することが次の審査では問われるとのことでした。

持続可能で質の高い医療システムはJCIばかりではなく、ISOでも大きなトピックとなっています。昨年10月、医療の品質管理に関する初めての国際規格である「ISO7101」が誕生しました。医療に特化したISOというだけあり、より効率よく質の高い医療を提供したり、超高齢化社会やAIの台頭など目まぐるしく変わる社会に対応し、持続可能な組織づくりのための要求事項を規定していると言います。亀田グループでもISO9001からの切り替えに備え、現在準備中です。

アントニオ部長が見た世界

JCIの審査員やアドバイザーとして、世界中の様々な医療機関を訪れる機会のあるアントニオ部長。JCI認証を受ける医療機関は増加の一端を辿っていると感じるそうです。その背景には国の政策としてJCI認証を目指す、カタルのような国の存在があります。国内ほとんどの医療機関がJCI認証を受けている背景には、政府が国の医療機関の品質の底上げにJCIを活用したいとの思いがあるそうです。

JCIやISOをより質の高い医療サービスを提供するために活用したいという思いは亀田隆明理事長にも共通していると言います。しかし、いつも隆明理事長には「職員になるべく負担の少ない方法で」とも言われているそうです。アントニオ部長にとってもそれは大切な指標

で、「資源は限られている」ということも念頭に置くことが大切だと言います。米国の医療機関に比べると、日本の医療機関は4割程度の資本で運用しているというデータがあります。その割には米国の医療機関はうまくまわっており、医療訴訟への備えなど患者さまに直接かわらないことでの出費も多いそうです。またサウジアラビア国家警備隊のための病院では、200床に対し品質管理専任の職員が200名もおり、あらゆる病院を見てきたアントニオ部長も驚いたそうです。しかし医療の質でいうと亀田は負けていないと強調します。特に日本の医療は非常に効率よく運用されており、必ずしも質と量が比例するわけではないと感じることも多いそうです。

アントニオ部長の取り組み

アントニオ部長が着任してからスタートした取り組みは数多くありますが、代表的なものを2つご紹介します：

① Walk with meキャンペーン

アントニオ部長が院内を移動したとき、「改善の余地があるな」といくつか目に留まる事柄を見つけたことがきっかけで生まれたそうです。「改善点」を一人で見つけるのはもったいない、チームでこの知見を共有したいとの思いから生まれたのが「Walk with me(一緒に歩こう)」でした。訪問先のエリアを選び、品質管理課のメンバーだけではなく、医療安全・感染管理・労働安全・災害対策・保安管理・施設管理など様々な担当者の視点から改善できそうなところを探していきます。

Walk with meでは写真を記録に貼付し、環境改善委員会で院長を含めたメンバーに共有します。院長自身が院内を巡回するケースも多いそうですが、院長も環境面を細かくチェックすることは容易ではありません。実施ごとにリーダーが変わり、それぞれの視点から知見がたまっていくのも特徴のひとつです。

② 医療スタッフの資格確認

近年医師免許を持たない人が医療行為を行って問題になったことがニュースを賑わせました。こうした「なりすまし」を防ぐためにも始まったのが「医療スタッフの資格確認」でした。JCIがなければおそらく行うことはなかったという資格確認は非常に手間のかかるプロセスで、人事部と力をあわせ、コツコツと時間をかけて達成したと言います。

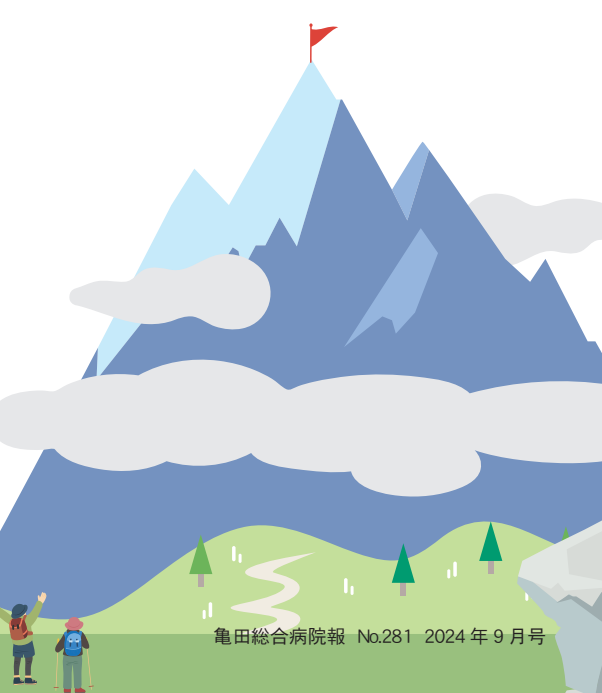
「JCIは地域にもよい影響を与える」とアントニオ部長は言います。医療スタッフの資格確認はひとつの例だとしています。地域の人が「この人は本当に医師なのだろうか」「この人が検査を行っても大丈夫なのだろうか」などの心配をすることなく亀田を受診していただけることが大切だと言います。

次のステップへ

これから重要なキーワードを「継続性」とアントニオ部長は強調します。それは前述した感染症や災害対策だけではなく、例えばスペインの医療機関ではすでに医療サービスを提供するまでにどの程度CO₂(二酸化炭素)を排出したかを図る「carbon footprint」を意識しているそうです。これは限りある地球の資源を大切に使うという考えからきていると言います。

AIやテレヘルスの台頭など、私たちの知っているこれまでの医療が大きく変わる日はそう遠くないように感じています。一方で財政面で危機的な状況に面している医療機関も少なくありません。安定して医療を提供するためにもJCIに追加される新たな2つの基準は前述した「継続性」に加え「IT」だそうです。

こうした取り組みを日々の業務に落とし込む大切さを、アントニオ部長は「prepare for the next patient, not the next survey(備えるべきは次の審査ではなく、次に来る患者さま)」とくり返します。JCIもISOもあくまでツールのひとつであり、一番大切なのは目の前の患者さまだと言い、亀田の品質管理を亀に例えます。「亀はじっくり見ているとあまり動いていないように見えます。でもしばらく間を開けてみるとはるか先に進んでいることがあります。ゆっくりと確実に歩みを止めないこと、これこそが亀田の強みです」。



2016 亀田京橋クリニック JCI 認証取得
2018 亀田リハビリテーション病院 JCI 認証取得
2018 亀田ファミリークリニック館山・亀田 MTG クリニック・亀田 IVF クリニック幕張 ISO9001 認証取得

2019 亀田総合病院・亀田クリニック臨床検査室 ISO15189 認証取得

看護の目

PSR として学んだ患者さまの対応

PSR課第2 平山彩紗



私は元々亀田クリニックに患者として通院しており、PSR(外来患者サービススタッフ)の対応する姿を見てPSRという職業に興味を持ち入職しました。

実際に入職して業務の内容を知っていくと、私が患者として見ていたPSRの仕事は患者さまの対応だけでしたが、もっと複雑でいろいろな業務があることが分かりました。入職してから1年ほどは、聞きなれない医療用語など色々なことを覚えるのに精一杯でしたが、今年で3年目になり仕事にも慣れてきて、段々と心に余裕を持って業務をこなすことができるようになってきました。

私が最初に担当することになったのは脳神経内科でした。脳神経内科は頭痛や認知症、脳梗塞やパーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症などの患者さまが来院されます。後遺症や病期の症状などで体が動かしにくかったり、麻痺があったりして杖や車いすを使用している方やご高齢の方も多くいることから、転倒や転落に細心の注意を払わなくてはなりません。

ある時、外来看護師さんが患者さまに対応する様子を見ていて、ふらつきのある患者さまに対して、「診察に呼ばれても焦らずに、ゆっくりで大丈夫ですよ」と声掛けしていました。私はそういった声掛けはしたことがなかったのですが、あとで看護師さ

んから「患者さまは診察に呼ばれると、早く診察室へ行こうとして心が焦ってしまう。だから、診察前にこういった声掛けをして、少しでも安心させてあげることが転倒の防止に繋がるんだよ」と教えていただきました。

それからは私も診察前に患者さまへ声掛けに行く際に、転倒が心配な方には「診察に呼ばれても焦らず、ゆっくりで大丈夫ですよ」と声掛けをしています。そうすると患者さまは「ありがとうございます」と安心した表情をしていました。先輩看護師に教えてもらわなければ私はそれに気づけなかったかもしれません。そういった少しの気遣いや声掛けで患者さまの不安や心配を和らげることができることを知りました。それからは患者さまの立場に立ち、何が分からないか、不安なのか、などを考えて対応ができるようになってきました。

患者さま対応の中で、電話対応をすることもあります。電話はお互いの顔、表情が見えない状況で対応をしなければなりません。そのため、自分の言葉遣いが間違っていないか、対応に問題はないか悩んでいたため、上司に相談したことがありました。ある時、患者さまからお電話で「今日、薬を受け取ったが入っていなかった薬がある。もしかしたら、失くしてしまったかもしれない」と相談され、薬局に

患者さまに寄り添う大切さ

PSR課第2 係長 仲村知子



患者さまからの「ありがとう」は私たちPSRにとって何よりも嬉しい言葉です。

私たちPSRは、外来だけでなく電話で問い合わせをいただいた患者さまとお話する機会も多く、相談や患者さまご自身の思いを聞くことがあります。そのため、接遇に関する研修にも多く参加し、正しい敬語や言葉遣いなどを学んでいます。

しかし、大切なのはそれだけではないと思います。患者さまに安心・信頼して話しやすい印象を与えられるような身だしなみ、そして何

より大切なのはしっかり傾聴することではないでしょうか。不安な気持ちや思いに寄り添うことで、患者さまが抱えている本当の思いに気づくことができると思います。

私たちPSRは直接患者さまのケアをすることはありませんが、その分、患者さまの思いに気づくことをとても大切にしています。寄り添うこととは思いに気づくこと。時には寄り添うことの難しさに直面し、思い悩むスタッフもいます。しかし、小さな気づきの積み重ねが患者さまに寄り添うことにつながることを学び、感じ、日々患者さまに向き

合っています。

患者さまと接する中でいただく「ありがとう」は魔法の言葉のように、頑張って良かったと安堵と充実感をもたらします。今回の経験からその思いに気づき、成長している姿は素晴らしいと感じました。同じ思いを抱き、患者さまに寄り添えるPSRが増えていくことを願っています。そして患者さまが亀田クリニックに受診して良かったと、最後は笑顔でお帰りいただけるようスタッフ教育に努めていきたいと思っています。

確認をしたり、患者さまの状況などを確認したりして、本当にお薬が入っていなかったのかなど長い時間電話で対応したことがありました。最終的には患者さまの方でお薬を発見したのですが、その際、「長い電話対応をしてくれてありがとうございました。あなたが聞いてくれていたので、一度探した所をもう一度探してみようと思って探したら見つかりました。本当にありがとうございました」と感謝の言葉をいただきました。その言葉に私は、長い時間の電話対応や薬局などに確認を取って大変だったことを忘れてしまうくらい嬉しく、がんばって良かったという気持ちになりました。その件で相談していた

上司からも、「対応する中で敬語はもちろん大切だけれど、それだけではない。きっとあなたの対応で患者さまも落ち着いて考えることができたのだと思う。患者さまにそう言っていたのなら、自信を持って」と言われ、私はそれから少しずつ自分の対応に自信を持つことができるようになりました。

入職してから辛かったことや悔しかったこともありましたが、嬉しかったこともたくさんありました。まだまだ不安なことはたくさんありますが、今までの経験を大切に、PSRとしての自分の仕事に自信を持ち、患者さまの不安に寄り添えるよう、今後も成長していければと思います。

CLOSE UP NEWS

クローズアップニュース

広島県から湯崎知事一行が来鴨

6月10日(月)、広島都市圏の病院の再編・統合を進める湯崎英彦広島県知事一行が当院を視察。少子高齢化が進むなかのように地域医療を維持していくのか、幅広くディスカッションをしました。

医師の不足や偏在、救急医療体制などの医療課題を抱える広島県では、医療資源の集約と症例の集積を目的に、県立広島病院、JR広島病院、中電病院、広島がん高精度放射線治療センターの4施設を統合し、2030年に1,000床規模の新しい拠点病院を整備する構想が進められています。新病院では救急医療、がん医療、小児医療、災害医療といった高度医療の充実をめざすと共に総合診療専門医の育成にも注力する計画で、少子高齢化が進む千葉県南部で同規模の病院を運営する当院の取り組みを視察するため来訪されました。

施設見学では、高度急性期医療を支える上で欠かすことのできない手術室や集中治療室(ICU)などを見学。その後のディスカッションでは、地域の医



(左から2人目が湯崎知事)

療機関との役割分担や連携、医師等スタッフの確保・育成、総合診療専門医の育成など、限られた時間の中で意見交換が行われました。特に高齢化で併存疾患をもった患者が増えるなかで、専門医と伴走しながら、退院まで幅広い視野から患者さまに最適なケアを実践する「ホスピタリスト」の活動に高い関心が寄せられました。湯崎知事は視察後、「目から鱗のお話がいろいろ伺えてよかった」と、当初の目的を果たし満足された様子で当院を後にしました。

春季防災避難訓練を実施



当院では消防法で定められた火災を想定した防災避難訓練と初期消火訓練を年2回実施しており、6月29日(土)午後、春季防災避難訓練を実施しました。

亀田総合病院A棟3階スタッフルーム内のコンセントから出火し、周辺の段ボールやソファに燃え移ったという想定で、出火階と直上階のスタッフおよび自衛消防隊を中心に総合訓練が行われました。

火災感知器の作動を受け、火元確認、拡声器による入院患者さまへの避難準備の声かけ、避難用資機材の調達指示、初期消火、中央監視室・消防署への通報、模擬患者への状況説明・避難誘導・搬送手順などを検証しました。中央監視室では火災感知器・消防設備機器の作動と放送方法の検分。自衛消防隊は火元参集までの時間計測や出火フロア職員との連携方法について確認しました。

また、今回は屋外避難になった場合の搬送や避難に必要な車いす・ストレッチャー・点滴棒などの物品や、搬送に必要な人員をどのように確保するのかの検証も行われ、今後消火活動とともに屋外避難を視野に入れた訓練の必要性等を共有しました。

その後、A棟1階ピロティにて消火器と消火栓の操作方法について説明を受け、実際に初期消火訓練が行われました。今回の春季防災避難訓練には195名の職員が参加し、防災への意識を高めました。

第38回日本神経救急学会学術集会

6月15日(土)、脳神経内科部長の安藤哲朗医師が学会長を務める「第38回日本神経救急学会学術集会」が当院で開催されました。神経系の救急疾患を扱う医師ら100名超が全国から集まり、神経救急の質の向上をめざして討論しました。

日本神経救急学会は、主に関東地区の若手の神経系の救急疾患の勉強会としてスタート。神経系の救急疾患は、原疾患や病像が極めて多様であり、その治療には従来の科・講座の枠を越えた幅広い知識と経験が求められます。そのため、救急医、脳神経外科医、脳神経内科医、内科医など、日頃から神経系の救急症例を扱う多彩な診療科の医師が一堂に会し、症例を持ち寄って意見交換を行っています。

今回の学術集会では「診療科の垣根を超えた脳

神経救急」をテーマに、すべての診療科が一緒に討論できるように工夫して、脳卒中や非癲癇性てんかん重積状態などのシンポジウム、セミナーを開きました。会長講演は「急性脊髄症の救急」でした。

安藤医師は今回の学術集会を振り返って「当院の多くのスタッフにお手伝いいただき、よい学会になりました。天気にも恵まれて、全国から集まった先生方が、鴨川の景観のすばらしさや亀田総合病院の施設の立派さに驚いていました。多くの先生方から、鴨川に来てよかった、勉強になり楽しかったという言葉をいただいています」と述べています。



南房総MC協議会症例検討会

地域の救急救命率向上をめざし、7月3日(水)午後、「南房総メディカルコントロール協議会症例検討会」が亀田総合病院ホライズンホールを会場に開催されました。



傷病者に適切な医療を提供し後遺症なく救命するためには、病気やけがが発生した時点から、適切な処置を行い、できるだけ早く適切な医療機関へ搬送する必要があります。そのため、傷病者を病院へ搬送するまでの間、緊急度や重症度を判断し、医師の指示のもと必要な処置を行う救急救命士や救急隊員の役割は大きく、その応急処置の質を担保するメディカルコントロール体制の充実を核とした、消防機関と

医療機関との緊密な連携が不可欠です。

そこで、当院救命救急センターの不動寺純明センター長を会長とする「南房総メディカルコントロール協議会」では、実際に救急隊が経験した珍しい症例を用いてその活動を振り返り、事後検証する取り組みを年2回行っています。

この日は、安房、夷隅に加え、君津、富津、長生消防本部からも参加があり、総勢70名の救急隊員が12の班に分かれて、脈あり心室頻拍症例、ショックの鑑別に苦慮した症例、クルー・リソース・マネジメントの効果が発揮された症例について検証。自身の経験や地域の医療体制などを踏まえながら、どのような対応が望ましかったのか熱く意見を交わしました。

1症例ごとに不動寺センター長が救急医の視点から注意を向けてほしいポイントなどをアドバイスすると、参加者らは聞き逃すまいと熱心にメモを取るなど、プレホスピタルケアの質の向上をめざした貴重な交流機会となりました。



渡辺臨床検査技師

渡辺直樹臨床検査技師

臨床検査室副主任の渡辺直樹臨床検査技師の発表論文が一般社団法人日本臨床衛生検査技師会(以下JAMT)日臨技学術奨励賞「優秀論文賞」を受賞しました。

JAMTでは、毎年医学検査分野において優れた研究成果に対して、「優秀論文賞」と「特別奨励賞(論文)」を選出し表彰しています。

渡辺臨床検査技師の今回の受賞論文は、担当する感染症の迅速診断などで行われるLoop-mediated

学術奨励賞「優秀論文賞」受賞

Isothermal Amplification (LAMP)法という核酸検出検査において、内部精度管理で問題となっている課題の解決を目指したものです。

受賞を受け、渡辺臨床検査技師は「研究の成果が優秀論文賞に選ばれたことを嬉しく思っています。本研究が進展することで、より正確なLAMP法の結果報告に寄与できると考えます。今回の受賞は、研究実施と論文執筆にご協力いただいた皆様のおかげです。今後もより臨床検査の発展に貢献できるように努力してまいります」とコメントしています。

手術センターで新企画 中高生向け体験学習

将来を担う中高生に医療の仕事をもっと身近に感じてもらうと、「手術センター体験学習～見る知る 学ぶ～」が7月29日(月)午前・午後の2回にわたって初開催されました。市内3校の中学3年生6名と県立大多喜高等学校の3年生3名の計9名が、手術支援ロボットの操作(写真上)や器械出し体験(写真下)などを通じて医療の仕事への理解を深めました。

今回の体験学習の舞台は病院の心臓部とも言える周術期管理センター(以下、手術センター)。地域の基幹病院として超急性期医療を担う亀田総合病院では、毎日40件もの手術が行なわれており、さまざまな職種が術前・術中・術後を通して、手術が安全かつ円滑に進むよう専門性を活かしつつ働いています。

手術着に着替えた参加者は、オリエンテーション後、感染対策の基本である「手洗い」から医療体験をスタート。テスターを用いて確認してみると、指先などに洗いが残しが見つかり、日頃何気なく行っている手洗いの注意点を再確認しました。その後、2班に分かれてシミュレータなどを用いた医療体験に取り組みました。シミュレーションセンターでは手術支援ロボット「ダヴィンチ」や腹腔鏡手術のシミュレータを使った操作体験を、手術室内では手術室看護師が日頃行っている器械出し体験や、気管挿管と換気の介助体験、心臓マッ

サージなどを順番に体験。参加者からは「医療に興味を持てた」「とても興味深く楽しかった」「いろいろ体験学習ができてよかった」などの感想が聞かれ、医療の仕事の一端を医療従事者から直に学ぶことで、より理解が深まったようでした。

すべての体験を終え、あいさつに立った植田健一周術期管理センター長は「手術というと外科医のイメージだが、実際はさまざまな職種が専門性を活かして働いている。そのなかにはきっと皆さんそれぞれにあった仕事があるはず」と、医療の仕事の多様さを紹介。最後に赤穂海香師長から体験認定証が授与され、約2時間の体験学習はあっという間に終了となりました。

手術センターの体験学習は8月23日(金)にも鴨川中学校から14名の参加が予定されています。当院では今後も医療の仕事に興味を持つきっかけづくりや、進路選択する際の参考となることをめざし、継続して中高生への体験学習の機会などを設けていく予定です。



外国人患者を理解する本『外国人患者への周術期マネージメント』好評です！



植田医師

亀田総合病院の副院長であり、麻酔科主任部長、周術期管理センター長の植田健一医師が編著した『外国人患者への周術期マネージメント』(日本医事新報社、4,510円)が話題になっています。

近年、日本の医療機関には多様な国籍の患者が訪れており、英語が通じないケースや、文化的・宗教的背景に配慮が必要なケースが増えています。本書は、植田医師がアイオワ大学麻酔科で臨床医として経験した人種ごとの文化・宗教・身体面の違いに焦点を当て、さらに踏み込んだ視点で注意すべきポイントをまとめています。

植田医師は、日本の手術で使用する機器や備品は、一般的に身長140cm後半から180cm、体重は50kgから100kg程度の日本人を想定しているが、人種のるつぼと言われるアメリカでは、多様

な体格や体型の患者が訪れることが当たり前。またコロナ下において、酸素飽和度を測定するパルスオキシメーターが黒い肌の患者で高めの数値を示すことが米国で問題視されたことを例にあげ、こうした人種の違いがトリアージに影響を及ぼし、結果予後を悪化させる可能性があるとの議論が起こっているが、日本人患者しか診る機会がない医療機関にとって、こうした問題に気づいてもらう契機になればと話します。

本書について植田医師は「ふだんから外国人患者を多く診ている医療機関だけではなく、あまり対応する機会が少ない病院にこそぜひ読んでほしい。本書が外国人患者を理解する一助になることを願っています」とコメントしてくれました。



国際スポーツイベント帯同活動報告会



南原理学療法士

8月1日(木)、リハビリテーション事業部にて「国際スポーツイベント帯同活動報告会」が行われました。

医療や介護の現場で、運動療法と物理療法を用いて患者さまにリハビリテーションを提供する理学療法士ですが、その活躍の場はスポーツ分野にも及びます。7月上旬、スロバキアで開催された「カヌースラローム世界ジュニア選手権(U18&U23)」に当院リハビリテーショ

ン室の南原宗治理学療法士が公益社団法人日本カヌー連盟のトレーナーとして帯同。ケガの予防やコンディショニング調整など、医療面から選手を支えました。

報告会で南原理学療法士は、海外遠征に必要な準備や、出場判断が迫られた急性腰痛の選手のエピソードなどを交え宿舎や競技会場でのメディカル活動を紹介。参加者からは、選手やコーチとのコミュニケーションで工夫した点など、見聞を広げる貴重な機会としてさまざまな質問が飛び交いました。

今年も開催 Kameda Cup in Kamogawa 2024



鴨川市東条海岸のマルキポイントで、初夏の風物詩となっている医療従事者のためのサーフィン大会「Kameda Cup」が今年も開催されました。この大会は2012年から開催され、途中東京オリンピックや感染症の蔓延で中断しましたが今年で11回目。

今年は例年より少し早い7月7日(日)に開催。朝は濃い霧が立ち込め、競技のスタートが遅れたものの、照りつける太陽の下、医療・福祉従事者や日頃人命救助や医療教育に従事している選手たちがサーフィンの腕を競いました。

季節外れの猛暑日となったこの日は、朝から熱中症警戒アラートが発表され、会場では熱中症を防ぐために例年より多くのテントが設置され、ミストファンを利用して来場者に涼を提供しました。また、今年も亀田総合病院救命救急センターのスタッフが会場に待機し、体調不良者の治療に当たりました。

事務局の発表によれば、今年は140名の参加選手に加えて約100名のステージ出演者が会場を盛り上げ、来場者数も合わせると約800名が、競

技の応援やステージイベントの観賞、鴨川グルメの堪能など、皆思い思いに梅雨の晴れ間の初夏の一日を堪能しました。

恒例となったプロサーファーによるエキシビション(写真下)では、プロの鮮やかなサーフィンに来場者の目が釘付けになっていました。その後に行われたアダプティブプロサーファーによるエキシビションでは、障がいに合わせて腹ばいや正座で波に乗るスタイルが紹介され、力強いサーフィンが会場を沸かせました。また、「みんなの海プロジェクト」では昨年からはまった車いすやバギーでも砂浜を移動できる「砂浜ロード」に加え、今年は一般社団法人サーファーズケアコミュニティNami-communicationsの皆様が、障がい者や障害のあるお子様向けのパラサーフィン体験をサポートしました。



病院は 誰かの仕事で できている

今回の部署 ユニクロ 亀田総合病院店

あらゆる人の生活を、より豊かにするための服「Life Wear」を提案するユニクロ。機能性にすぐれたシンプルなデザインの服は、求めやすい価格帯もあって、あらゆる世代から支持されています。「院内にユニクロがあったら…」そんな職員の声を受け、2023年5月、「ユニクロ亀田総合病院店」は生まれました。医療従事者の鴨川ライフを支えるとともに、ある時は急な入院で事前準備ができなかった患者さまの駆け込み寺として、また変化に乏しい入院生活のなかで日常を感じられる場所として機能しています。

モチベーションアップの秘密

スタッフ同士、感謝の気持ちを伝えあうthank youカード。日々の仕事のなかで同僚へ「ありがとう」と思ったことを言葉にして伝えるユニクロならではの制度は、コミュニケーションの活性化にも一役買っています。

松崎店長

お仕事のやりがいとは？

外来受診の度に立ち寄ってくださる方など、顔見知りのお客さまも増えました。前回購入された服を着てまたご訪問いただいたり、「友人にもプレゼントしようと思って!」と笑顔で来店くださる姿を見ると嬉しくなります。

「ようやく退院が決まったから…」と、自宅に帰る日の服を求めて来店された入院患者さまの服選びをお手伝いしたことがあります。季節が変わり、手持ちの服では用が足らず来店されたとのことでしたが、特別な日の一着にユニクロを選んでいただき、とても幸せです。

業務でここがけていることは？

売り場面積が60坪と限られるため、店頭と並べる商品数を絞り込んでいます。そうしたなかでも、お客さま一人ひとりのサイズや生活環境にあわせたスタイル提案ができるよう努めています。

店頭になく商品やスタッフが身に付けているアイテムで気になるものがありましたら、遠慮なくお声がけください。オンラインストアからお取り寄せもできますよ！

病院店だからこそのこだわりは？

車いすユーザーへの対応を学ぶ研修のなかで、実際に車いすに乗って店内の環境を確認したところ、想像以上に目線が低く、手にとってみるできない商品があることに気づきました。店内の動線や陳列はもちろん、どういったサポートが求められるのか、改めて考えるきっかけとなりました。

入院患者さまのなかには、術後、からだへの負担の少ない下着などを求めて来店される方がいます。病院店はそうしたデリケートな悩みにも寄り添う場なのだということを意識して対応しています。

ご高齢の方や補助員・車いすをご利用の方、補助犬（盲導犬・介助犬・聴導犬）を連れた方も、誰もが安心して買い物できるように、利用者目線で売り場づくりを行っています。



もっとユニクロ活用術

ユニバーサルファッション

・前あきブラ：入院患者さまから需要の高い前あきインナー。なかでも前あきブラはパット受けが上下2つに分かれているので、乳がん術後の方などでも自分の胸の形にあわせて着用いただけます。

・こども用ロンパース型前あきインナー：110～160センチまでのサイズ展開と、着脱の容易さ、手頃な価格設定で、医療的ケアを必要とするお子さまのご家族にとっても好評です。

（注：店舗に在庫はありません。オンラインストアまたはお取り寄せ対応商品となります）

バリアフリーな店内

・車いすごと入れる試着室：3室ある試着室のうち1室は車いすごと入れ、いすが備え付けられています。丈や袖が長すぎるとタイヤに巻き込まれてしまうなど、思わぬ危険につながることも。購入前に、試着の上ご確認ください。また、ボトムスの補正対象商品は店舗で裾上げを承っていますので、ぜひご利用ください。

・動線や陳列の工夫：オープン当初、入口近くには背の高い棚を設置していましたが、車いすの方やご高齢の方などの利便性を考え、低いものに変更。ハンガーの商品は手に取りやすいよう低い位置に置くなど、利用者目線で売り場づくりを行っています。

オープン時の陳列



改善後の陳列



ジェンダーレスファッション

・「男性」「女性」といった性別に関係なく楽しめるジェンダーレスのファッションが近年一段と広がりを見せています。ここユニクロでも、男性にも女性にも似合う男女兼用の服が増えています。体のラインを拾わないゆるめのアイテム、シンプルな色づかい…そんな服を求める方にオススメです。

・男性スタッフのなかには、レディースもののカーディガンをファッションに取り入れるなど、一つ上のおしゃれも楽しむ上級者も！

あなたのユニクロ、次に生かそう

・間もなく衣替えのシーズン。ユニクロではお客様が不要になった服を回収し、全商品をリサイクル・リユースする取り組み「RE.UNIQLO」を進めています。お洗濯の上、店舗までお持ちください。

回収対象：ユニクロ・ジーユー・プラス全商品（インナー・ソックス・グッズ含む）

松崎店長に
聞きました

スタッフの ユニクロ ライフ

ユニクロ亀田総合病院店では、さまざまなキャリアを持った個性豊かなスタッフが働いています。

お客さまにあったアドバイス

「お客さまの洋服選びをお手伝いさせていただくことがあります。後日、「選んでもらった服をリハビリに着て行ったら、とても動きやすかったよ!」などと声をかけていただくと、励みになります」

取材メモ 松崎店長曰く、「元美容師の経験をいかし、お客さまに明るく声がけしたり、アイコンタクトで質問しやすい雰囲気づくりを行うのが得意」と、接客スキルに太鼓判を押すOさん。3年前、上のお子さんが小学校に上がるタイミングで地元・鴨川へUターン。下のお子さんは生まれたばかりで働ける時間が限られるなか、心機一転、アパレルの仕事に挑戦。仕事と育児、バランスをとりながら、久しぶりの鴨川ライフを満喫中。

発信したことが届くおもしろさ

「アパレル未経験ながらも、オープニングスタッフとして入社。洋服のことを学びながらの1年でした。現在は後輩スタッフの指導役として、またVMD*担当として、病院職員向けに毎週金曜日、鴨川サイトで今週の折り込みチラシとオリジナルスタイルヒントを配信。「鴨川サイトで見たよ」と、紹介アイテムを求めて来院くださる職員の方もあり、発信したことが届く喜びを感じています」

取材メモ 水族館で22年間、海獣トレーナーとして勤務した異色のキャリアを持つKさん。接客をしていると、時折、水族館帰りの観光客が楽しそうな様子で濡れた服の替えを求めて来店することもある。そんな時、トレーナー時代に自分が教えたことが、今もすっかりショーの中で実践され、観客を笑顔にしていることを実感。水族館の仕事は離れたものの、嬉しくなる瞬間でもあるのだとか。

* VMD（ビジュアルマーチャンダイジング）とは、空間設計や商品陳列の工夫で、お客様にとって「見やすく、選びやすく、買いやすい」店舗を実現することで、一つひとつの商品の魅力的な表現と、売上最大化を両立する役割

亀田総合病院報

No.281

亀田ホームページ <https://www.kameda.com>

2024年9月1日発行（隔月発行） 発行責任者：亀田隆明 編集：広報企画室

発行：医療法人鉄蕉会 〒296-8602 千葉県鴨川市栗町929

当広報誌は個人情報保護のもと本人の了承を得て作成しており、本用途以外の転用は固くお断りしております。

All articles on this PR magazine has been printed under the permission of the subscriber to protect their personal information.

All editorial content and graphics may not be copied without the permission of Kameda Medical Center, Public Relations which reserves all rights.

